

倉橋惣三の誘導保育論の今日的意義 —保育理論の発生から系統的保育案の展開まで—

小 山 優 子
(保育学科)

A Study on Kurahashi Souzou's Educational Inducement Theory
on Kindergarten

Yuko KOYAMA

キーワード：誘導 Inducement

保育理論 Theory of Early Childhood Education

系統的保育案 Systematic Teaching Plan

幼稚園 Kindergarten

1. はじめに

「日本の幼児教育の父」「日本のフレーベル」と呼ばれる倉橋惣三は、明治後期から昭和30年までの間に日本の幼稚園教育界において幼児のための保育理論や実践方法を提唱し、戦前戦後の幼児教育制度の設計にも多大な影響を及ぼした人物である。

倉橋は『幼児の教育』誌上での執筆や幼稚園保母に向けた講演を行ないながら、東京女子高等師範学校附属幼稚園主事として幼稚園に関わり、その過程で誘導保育論を提唱していったが、倉橋の幼児教育の理論や系統的保育案は当時の保母、また現在の幼稚園・保育所の保育者にとってどのような意味があるのだろうか。本稿では、明治以降の幼稚園教育の成立を踏まえ、倉橋が全国の幼稚園保母に向けて保育理論を展開し始めた頃から誘導保育論・系統的保育案の完成時までの過程を考察し、保育現場における倉橋の保育理論の今日的意義を明らかにすることを本研究の目的とする。

2. 明治以降の幼稚園教育

1) 明治以降の幼稚園教育の実態

幼稚園の歴史は、明治9（1876）年の東京女子師範学校附属幼稚園の設立から始まる¹⁾。国は明治5（1872）年に学制を制定し、6歳から9歳までの4年間の修業年数を持つ下等小学を第一段階の学校とし、その下に小学の一種として「幼稚小学」を位置づけ、国民すべてが就学するよう努力するものとした。しかし幼稚小学は提案に終わり、結局幼稚小学は一校も開設されなかった。文部省は明治8（1875）年に「養育の責に任する者を養成する」ことを目的に東京女子師範学校を設立したが、これに合わせ文部省は国に幼稚園の設立についての伺いを立て続け²⁾、明治9年に日本で初めての幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園（現お茶の水女子大学附属幼稚園）が開設されることになる。続いて明治12（1879）年に「教育令」が制定されるが、ここで幼稚園という名称が教育法令史上初めて使わ

れ、幼稚園は小学校以上の学校とは別種のものであると説明された。この年に幼稚園は全国に公私計4園しかなかったが、明治21年には全国に72園、明治42年には442園、昭和17年には2058園と幼稚園の数が増加し、明治から昭和20年までの間に少しずつ幼稚園が普及していった。しかし、最も普及した昭和16年度でさえ5歳児の就園率は全国では全体の1割でしかないという現状であった³⁾。

新設された東京女子師範学校附属幼稚園は、園長と保母が置かれ、初代園長は東京女子師範学校の関信三、主席保母はドイツの保母養成学校を卒業しフレーベル主義の幼稚園教育を知っていた松野クララが就任するなど、フレーベルの幼児教育思想と恩物中心の教育内容が取り入れられた⁴⁾。また、明治10(1877)年に制定された附属幼稚園規則は、幼稚園の目的や入園の年齢、1日の保育時間などが定められたものだが、この規則が全国の幼稚園の模範となっていた。附属幼稚園の保育については、恩物中心主義から次第に東京女子師範学校教授であった中村五六、東元吉、和田實などの自由主義的な保育理論が取り入れられていった。

2) フレーベルの恩物主義と自由保育

東京女子師範学校附属幼稚園は、日本の幼稚園萌芽期における幼稚園のモデル的役割があったが、保育の実際はドイツのフレーベル主義の幼稚園や米国の幼稚園運動の教育方針や教育方法をそのまま導入したものであった⁵⁾。特に明治9(1876)年の桑田親五訳『幼稚園』や関信三訳『幼稚園記』、明治12(1879)年の関信三編集『幼稚園法二十遊戯』が出版され、フレーベルの二十恩物についての解説などが書いてあるこれらの書籍が附属幼稚園や明治期の幼稚園の保育の手引書として使われていた。明治10年には附属幼稚園規則が制定され、「物品科」「美観科」「知識科」の3つの保育項目とその25の子目が決められ、恩物の使い方や粘土細工、唱歌、説話、体操、遊戯などが附属幼稚園の保育の中で行なわれた。当時の保育方法は30～45分の時間で活動を区切り、上記の保育項目を指導していた。

明治29(1896)年、東京に設置された官、公、私立幼稚園の有志によりフレーベル会という全国的

な保育研究団体が発足し、会長は女高師学校長が、主幹には女高師附属幼稚園主事が就くことになった⁶⁾。このフレーベル会での幼稚園制度の整備要望が、明治32(1899)年に「幼稚園保育及設備規定」という形で文部省令として制定されることになる。ここでは、保育内容を遊戯、唱歌、談話、手技の4項目で示し、遊戯を一番最初に置いたこと、恩物を手技の中に入れて一番最後に置いたことに象徴されるように、明治前期の恩物主義からの脱皮を示したものであった⁷⁾。これらの遊び重視・自由保育への転換は、当時の女高師教授の中村五六や東元吉、和田實の影響もあったが、この後、女高師教授となり附属幼稚園主事となって附属幼稚園の教育方針に大きな影響を及ぼしていく倉橋惣三に引き継がれるのである。

3. 倉橋の幼稚園教育への関わり

1) 倉橋の児童研究から幼稚園教育へ

倉橋が教育や幼稚園教育に関心を持ち始めたのは、明治33(1900)年に東京府第一高等学校に入学した頃である。倉橋自身、「彼の子どもずきは前からのことで、東京府立一中の四年生頃から、その当時創刊間もなかった『児童研究』を、よく分かりもしないのに月々購読して喜んでいた」⁸⁾というように、明治31(1898)年創刊の子どもと教育の心理学研究雑誌を読みながら、東京女高師附属幼稚園に遊びに来ていたようである。その後、明治36(1903)年に東京帝国大学文科大学哲学科心理学専攻に進み、元良勇次郎のもと児童研究を学びながら附属幼稚園にも入り浸っていた。

東大大学院で児童心理学を研究していた倉橋は、明治43(1910)年に東京女高師の嘱託講師になり、女高師で児童心理学を教えると同時に、青山女学院(現青山学院大学)講師として心理学と教育学を教えることになる。この頃倉橋は、附属幼稚園に出入りしながら「幼児」そのものに興味関心を抱いていたが、次第に「幼稚園といういれものや、何のために、そのいれものへ子どもを集めるか」⁹⁾にも興味を持ち始め、フレーベルの原典から保育理論の基本研究を始めることになる。一方、東京女高師附属幼稚園内にあった保育の研究会「フレーベル会」の

機関紙『婦人と子ども』の編集に和田實とともに関わり始め、児童心理学に基づく子どもや外国の保育に関する執筆を始める。この頃倉橋は、日本児童研究会（1912年、日本児童学会に改称）の幹事と児童心理学の専科委員をしながら『児童研究』に投稿しつつも、「（倉橋は）『児童研究』は、その『純学問的興味』よりも、むしろ『教育のための知識』として多く要求されていると述べ、日本児童学会とは正反対の方向性を打ち出し」¹⁰⁾のように、倉橋の興味は児童心理学における学問的研究の追及よりも、児童心理学の知見を保育現場にどう生かすか¹¹⁾という教育的視点に移っていく。倉橋は、『婦人と子ども』誌上で幼稚園保母に向けた内容を発表しながら、明治45（1912）年に京阪神三市連合保育会で保育者に向けた講演を行い、以後10年近くも大阪市の保育講習会の講師しながら活動の軸足を保育現場に移していくことになるのである。倉橋の講演は好評で、倉橋の講演を聞いた幼稚園保母が「（倉橋の）理論を理論として聞くのではなく、すぐに実際の保育にとり入れ、その結果を報告するといった、理論と保育現場の交流が、惣三の実験的な保育理論を育てていった」¹²⁾のであり、倉橋の保育理論構築の原点は幼稚園保母への講演にあったといえる。

2) 倉橋の附属幼稚園への関わりの変遷

倉橋は大正6（1917）年、東京女高師教授及び附属幼稚園主事に就任し、附属幼稚園にも主事の立場で深く関わるようになる。そこで倉橋は、明治9年以降続いていた附属幼稚園の伝統的な保育であるフレーベルの恩物主義を否定し、より自由保育的な実践への改革を行なっていく¹³⁾。具体的には、「一、フレーベル二十恩物の系列をごちゃまぜにし、竹籠の中に入れ、積木玩具としたこと、二、遊戯室に掛けてあったフレーベルの肖像画を職員室の壁面に移した、三、朝の集会を廃止した」のである。これらは倉橋が主張していた「一日の保育は、自由な生活からだんだんまとまったものになっていくべき」という考えを附属幼稚園で実践したもので、これ以降、全国の幼稚園で行なわれていたフレーベリアン・オルソドキシーを否定し、恩物中心の知識注入的な「机の保育」や教師主導の形式主義保育、「教えすぎ

る幼稚園」への改善を全国の保育講習会で保母に向けて説いていくことになる。この恩物否定と自由保育が望ましいとする倉橋の考え方は、基本的には東や和田ら東京女高師教授が提唱していた自由主義保育の理論を引き継いだものであったが、それをさらに具体的に発展させていくものであった。また、大正7（1918）年には倉橋が主幹となっていた「フレーベル会」の名称を「日本幼稚園協会」と変更し、機関紙『婦人と子ども』も『幼児の教育』と改題し、全国の幼稚園の保育研究機関として、また幼児教育の正しい考え方を普及する雑誌に変更していった。

倉橋は附属幼稚園主事として奔走する中、文部省から教育学の在外研究員として欧米に派遣されることになり、大正8（1919）年から2年余、外遊する¹⁴⁾。この期間に訪れたニューヨークのコロンビア大学幼稚園やシカゴ大学幼稚園、ロンドンのマクミラン保育学校などの幼児教育施設への訪問は倉橋に多大な影響を与え、その後の倉橋の幼児教育の実践や講演、『幼児の教育』への執筆活動に反映されていく。大正11（1921）年に帰国後、再び附属幼稚園主事を勤めた大正13（1924）年まで、倉橋は附属幼稚園の実践に関わりながら保育理論を少しずつ形作り、それを保母向けの講演や『幼児の教育』誌上で発表していった。

倉橋は、大正13（1924）年から昭和5（1930）年の間、東京女高師附属高等女学校主事になり、附属幼稚園主事を退任することになる。この間、附属幼稚園へ直接関与する機会はなくなるが、幼稚園教育の主導的立場から全国の幼稚園教育の現場に倉橋の考えを『幼児の教育』誌上で発表していった。その中で、特に大正15（1926）年の「幼稚園令」公布については、「幼稚園令の制定は、狭く幼稚園界の喜びたるにとまらない。我が国民教育の一貫せる完成に向って、学齢前の一系列が確立せられたのである」とその喜びを語っている¹⁵⁾。また同年6月に開催された幼稚園令発布記念全国幼稚園大会では、「旧規定では、幼稚園というものをごく形式的に定義しているのに対して、新令では教育の内容をもって定義している」「第1条において『善良なる性情を涵養し』の一句」が盛り込まれたこと、幼稚園施行規則における保育項目に「観察という一項が加え

られたこと」や、「『等』という一字の加えられたこと」による保育項目以外の活動も保育に取り入れてよい方針になったことを挙げ¹⁶⁾、倉橋が幼稚園の保母に向けて話してきた自由保育の理念が法令に反映された意義を強調している。

大正15（1926）年、倉橋は長年、『婦人と子ども』『幼児の教育』に執筆した原稿を抜粋してまとめ、『幼稚園雑草』と題して出版している。昭和5（1930）年に3度目の附属幼稚園主事に復帰すると、昭和6（1931）年には「就学前の教育」も執筆している。これは坂元彦太郎の「彼の研究と経験とを集大成してつくりあげた、簡潔であるが、高度の理論的な緻密さを具えた幼児教育学書であり、その前後は、もちろんのこと、現在に至るまで、わが国でこれほどの高度な理論的体系が幼児教育に関して著作されたことはないであろう」¹⁷⁾の評のように、保育実践と結び合わせて構築してきた倉橋の幼児教育理論をまとめたものになっている。

倉橋が附属幼稚園主事の職を離れていた間、附属幼稚園の保母たちは倉橋の提唱した保育理論を踏まえて、附属幼稚園で展開した保育実践を『幼児の教育』誌上で発表していた。特に昭和7（1932）年以降に『幼児の教育』で毎号のように附属幼稚園の保母が、「わたくしたちの自動車」「特急列車『うさぎ号』」¹⁸⁾などの実践記録を掲載している。この中で菊池ふじのの「人形のお家を中心として」の実践において倉橋が人形の家についてのアドバイスをしたり、新庄よしこの「旅へー東京駅から」の実践記録には誘導保育の一案との題がついていることから分かるように、附属幼稚園の保母の実践に倉橋も関わりながら後の誘導保育や系統的保育案への理論化に結びつけたことがうかがえる。昭和9（1934）年には倉橋の幼児教育の体系的理論書『幼稚園保育法真諦』が、昭和10（1935）年には『系統的保育案の実際』が刊行されている。

4. 倉橋の保育理論の発生と誘導保育論の芽生え

倉橋が東京女高師教授並びに附属幼稚園主事として保育現場に関わってきた過程を見てきたが、この中で発表された倉橋の保育理論とはどのようなものであったのだろうか。

倉橋は明治45（1912）年の東京女高師の講師3年目の夏に、京阪神三市連合保育会で「幼児保育の新目標」と題して講演をしている¹⁹⁾。これは幼稚園保母の前で保育の講演をした初めての機会となったが、倉橋はこの講演の中で、新時代に合わせて神経系統の強靱な人間の形成が教育的に求められているとし、室内でフレーベルの恩物などの手技のみをするような机の保育をするのではなく、子どもが戸外において自然物でもって遊ぶような、戸外保育、野外保育、自然的保育が重要であると述べている。

大正3（1914）年から翌年にかけて、倉橋は『婦人と子ども』誌上で最初の体系的保育論「保育入門」を執筆する²⁰⁾。ここでは、幼児の発達特性に焦点を当てながら、幼児の感覚器官による感覚生活は積極的に活発的であり、その要求の強さは大人の想像以上であること、内的生活は具体的体験を通して活発な観念活動を行っており、その強い発表要求から言語、身振り動作、描画、製作等が表れること、遊び仲間が欲しくなり、共同生活の要求から対人感情が発達し、道德生活の萌芽がみられること、ここから、子どもが発達の特徴を損なわれずに主体的に充実して成長できるよう、子どもの生活を実現することが重要であるとした。さらに、倉橋は幼児が充実する条件として、児玉が指摘するように、「自発的（子どもの内的欲求に従う）、相互的（幼児集団の中で共同生活をする中で幼児相互の教育作用を活かす）、具体的（生活全体を教育対象にする）、習慣的（動作や情緒をしつけ的ではなく習慣的に涵養する）」という特徴があること、また保育者の留意点として、子どもの心身の健全な発達の促進と神経系統の養護、個性の保存²¹⁾の重要性を述べている。これらの見解は、倉橋が児童研究を通じて知り得た知識を子どもの特性や発達の視点から論じたものであるが、倉橋自身が保育の実践者の視点から子どもの発達を捉えて保育理論に展開させたものであった。

大正4（1915）年、倉橋は京阪神総合保育会で「幼児教育の特色」と題し、幼稚園の保育者に向けて講演している²²⁾。この中で倉橋は幼稚園教育の特色を、第一は、幼稚園を設立したフレーベルが注目したように、幼児の自発的生活を尊重しなければな

らないこと、第二は、自発的生活を教育の手段の上に用いるのみではなく、幼児の自発的生活そのものが内容的に非常に重要であり、幼児に相互的な生活をさせて互いに持っているところの自発的内容を鍛錬し、活動させていく機会を充分に与えること、第三は、幼児の生活をなるべく渾然として分割しないものにしなければならないこと、第四は、幼児教育は概念的、観念的でなく、むしろ情緒的であるとし、「幼稚園教育が自発的、相互的、具体的、情緒的といった特徴を持つものである」と述べている。

倉橋は昭和6（1931）年、岩波講座『教育科学』第6巻に「就学前の教育」と題し、全世界の就学前教育の実態と日本の幼稚園教育・家庭教育についての考えをまとめている²³⁾。この中で、わが国の就学前教育の目的は、「人間の基本教育」「身体の強靱」「性情の教育」の3つであり、これらの目標を達成するための教育方法として、「生活本位」「遊戯の尊重」「社会的」「環境的」「機会の補足」「欲求の充足」「生活による誘発」「心もち」の8つの方法的特徴を示している。倉橋は上記の8つの特徴を、「心もちは味である。就学前教育はその意味において味の教育である。心もちは感じである。その意味において感じの教育である。無味と不感は機械である。就学前教育は絶対に機械化を許さない。すなわち、幼児は遊べる時全きと共に楽しきことを忘れてはならぬ。社会的である時親しみであることを、環境的である時楽しみのあることを、機会を捕えらるる時うれしきことを、欲求の充足せらるる時感激することを、生活によって誘導せらるる時仰嘆することを、すなわち、この方法特性がいつでも合理的である上に心もちの裡に行なわれていることを忘れてはならぬ」とまとめている。ここにおいて、倉橋が「教育者自身の生活による誘導」「生活のもつ動き、力、換言すれば強く生活されているということが、幼児に及ぼすところの誘発的効果こそ、就学前教育法として重要なものである」と述べているように、子どもの心身の発達を促すための一方法として生活を通して保育者が誘発することの重要性を説いており、倉橋の後の誘導保育論につながる視点をここからうかがうことができる。

5. 倉橋の誘導保育論と系統保育案

1) 倉橋の系統保育案への展開

昭和8（1933）年夏に倉橋は日本幼稚園協会保育講習会で講演をし、その記録をまとめたものを翌年『幼稚園保育法真諦』として出版している。ここで倉橋は、「幼稚園が、幼児の生活の場として、その生活の形態が、幼児に適していなければならない」「幼児の生活を十分生活らしさにおいて害わないためには、幼稚園生活の形態に、いわゆる自由の要素をできるだけ多くもたせるということ」「幼稚園とは幼児の生活が、その自己充実力を充分発揮し得る設備と、それに必要な自己の生活活動のできる場所であること」、そして「幼児の生活それ自身の自己充実を信頼して、それを出来るだけ発揮させて行くということに、保育法の第一段を置く」²⁴⁾と教育の方法論を述べている。そして保育者の役割として、「幼児生活の充実指導」「幼児生活の誘導」「幼児生活の教導」と保育者の子どもへの関わり・指導の観点から関わりの水準が上がるモデルを示しながら、誘導保育論を展開している。倉橋は、「幼児のさながらの生活—自由設備—自己充実—充実指導—誘導—教導」という保育理論を提唱した上で、保育者がそれを具体化するものとして保育案の作成の必要性を説いている。特に誘導保育案²⁵⁾については、「ある組で水族館をもって誘導保育案を立てております。ある組は八百屋、玩具屋、またある組は海底、釣遊びをもって誘導保育案を立てています。（中略）つまり、何かしら子供の生活にまとまりを与えるようなものを用意していけばいいのであります」「案が発展性を多く含んでいるものでしたら、案そのものの力で次から次へ誘導していきましょう。そこで案として発展性の乏しい案でありましたら、その種類をたくさんしておくより外ありません」²⁶⁾と、幼児の遊びや活動にまとまりをみつけ、その遊びを発展させていくような保育者の誘導が必要であり、その誘導を示したものが誘導保育案になると述べている。また誘導保育案の実施期間については、「場合によりましては、一週間で別の誘導保育案に移っていかなければならぬかも知れませんが、長くて一か月位で替えなければならないでしょう。しかし、子

供の年齢が進みますと、その生活の連続していく力が大きくなります。都合によっては一保育期、また、一か年を一つの誘導案で通すことができるかもしれません」としているように、子どもの年齢・発達や、活動の発展性の豊かさ・乏しさなどの案そのものの性質により計画の期間が決定してくると述べている。ここでは、保育者の誘導の方法を保育案にし、子どもが活動に一定期間取り組むようなまとまりを含んだ計画案を立てることの必要性を述べながら、「第一学期はこういう事をやらせよう。第二学期はこういう事をやらせよう。あるいは一年を二つくらいに大きく分けてやらせようという具合に案が立てられるのでもありましょう」と様々な期間の幅で保育の計画を作成する短期的・長期的なカリキュラム立案の視点を倉橋は提唱している。

2) 倉橋の系統的保育案の実例

昭和10（1935）年、倉橋は『系統的保育案の実例』を出版し、附属幼稚園での保母たちの実践例から系統保育案の実例を示している。この本の解説²⁷⁾では、誘導保育案は「保育項目を保育項目として、個々の、しかも突発的に課してゆくのではなく、何かしら一つの主題をもって誘導してゆくところから、この名称を付した。その主題は換言すれば目的である。その目的を目指して各種の保育項目が、引きずり出されてゆくのである。すなわち、かくして、保育項目が、きれぎれのもの、はなればなれのもの、また、だしぬけのものでなくなる。元来が生活のものである保育項目が、再び生活の中に統合され、換言されてゆくところに、誘導保育案の特色がある」と述べている。

この本に掲載されている実際の系統的保育案は、「生活」と「保育設定案」の二種類の項目に分類され、「生活」はさらに「自由遊戯（第1欄）」と「生活訓練（第2欄）」に、「保育設定案」は、「誘導保育案（第3欄）」と、唱歌・遊戯・談話・観察・手技の保育5項目に分けた「課程保育案（第4欄）」に細かく分類されている。この分類の理由を倉橋は、「第一欄と第二欄を併せて『生活』として大括りしたのは、生活のままを、生活のままで指導誘導せん

とする意味であって、換言すれば、方法的に何等設定保育の性質を帯びないものである。（中略）ただ、保育案も幼児の生活を離れて行なわれるものでなく、保育が生活を土壌とする以上設定的な方法のみが保育案ではないとみなして、これをも保育案の中に置いたのである。尚詳しくいえば、保育案中、生活そのものの方へ最も即しているものといってよい」「第三・四の誘導保育案と課程保育案とは、方法的設定の性質をもっている。それを幼児の生活に結びつけ、はめ込んでゆく實際は、できるだけ自然の形、すなわち生活的なものにしたいのであるが、計画としては、保育者の方から持ち出し、少なくとも持ちかけてゆく方法的提案である予案である。よって、この両欄を大括りして、保育設定案と特に名づけた。つまり、広義の保育案を、純なる『生活』と狭義の『保育案』とに分けているのである」としている。誘導保育案について倉橋は、「従来のいわゆる保育案が、課程保育を主としているに対して、（系統的保育案は）新しい工夫と言われるかもしれない。課程保育のみでは、保育項目の羅列配当に終わって、どうも、幼稚園保育が学校の課業と同じ形態になる。つい強制にもなりやすい。それを、何とかして、生活的形態にし、幼児の生活感情を活かしてゆくことはできないかと考えたものである」としている。ここで倉橋は、誘導保育の理論を系統保育案の中で展開し、幼児の自然な活動である遊びや生活と保育者主導の設定的な活動を融合する形に計画案を立てながら、保育項目の羅列配当にならないように、幼児の生活の中で保育項目が展開されるようにするための案として活用しようとしたのである。

さらに、系統的保育案は、「年少組（満4歳－満5歳）と年長組（満5歳－満6歳）の二か年間に各三保育期に分ち、各保育期を週にしたがって立案したものであり、倉橋が「二年保育の週案である」というように、現在の幼稚園・保育所における教育課程・保育課程と呼ばれるものや、年間計画・週案などの指導計画が組み合わさった構造になっているという特徴がある。

昭和11（1936）年、倉橋は夏の保育講習会において「保育案」と題し講演を行なっている²⁸⁾。ここ

では、誘導保育について、「自由遊びの中にある自己充実であるとかあるいは充実指導であるとかいう事の次の段階として、誘導という問題を説き、そうしてその誘導、すなわち自由遊びの誘導から段々熟してきたものとして誘導保育案のお話をした」²⁹⁾と、自由遊びの中からテーマを引き出し、発展させていくものが誘導保育案であると説明しているが、一方で倉橋は誘導保育案を保育項目の点から考える必要もあるとし、「誘導保育案の名にかくれて保育項目が留守になってしまう傾きのあること」として誘導保育案に生じやすい問題点を挙げている。「誘導保育案の中には保育項目がどれだけちゃんと入っているかという事が大事です。ただ誘導的であるというだけでは、それは誘導保育案の形、誘導の仕方であって、保育案となるためには保育項目がちゃんと入れられていなくてはならぬのであります」「個々の保育項目は余りに個々的でありますから、これを全体の総合の中に入れ込むことによって生活の形にしようという誘導保育案を作りました」と、幼児が経験することが望まれる保育項目が誘導保育案の中に含まれ、展開されることが理想であるとしている。このような理想の形を述べながらも、誘導保育案と課程保育案を並列させている理由を2つ挙げている³⁰⁾。一つは「誘導保育案ばかりでは子どもは満足し難い。いわゆるインスピレーションかどうか知りませんが、それはそれとして純粹の単一興味でやりたいことがある。何となく歌を歌いたい、何となく遊戯がしたい。何となく何か作りたい。そういう生活の一面があるのであります。それで、それを満足させてやりたいというのが、保育項目をそれ自体として保育案の中に入れております一つの理由であります」、二つには「誘導保育案そのものの中には保育項目をきちんと片寄らぬように致しておりますけれども、その保育項目の個々の期待効果をもう少し徹底させようとするためには、これを抜き出してどこかでする必要があるのであります」としている。つまり、誘導保育案の中に保育項目がまんべんなく含まれ、子どもの生活の中で展開されることが望ましいが、保育項目自体を子どもがもっとやりたいという欲求を満たし、かつ誘導保育案の中で不十分だった保育項目

を別に挙げておくことによって、より補強して高めることができるという点から課程保育案の意義を説明している。「(保育項目を)計画しておくという意味での保育案では、何とか分けていかねばなりません。そうして、分けておきながら、一つ一つに強い線でしきれないで、分けてはおきながらずっと連絡させている。ただし、連絡するといったって、横にある観念的連絡を探って再び中心統合主義に陥ろうとするのではないが、ことによったらこれが一つになって、この渾然たる至境に行くかもしれぬような並べ方を特に作ってみるのであります。そこでこの計画を私は系統的だと言おうと思います。系統的だというのは、自由遊び何分、それから生活訓練何分、それから誘導保育案何分ということで行くのじゃない。できれば、一つに纏まってしまふことを可能ならしめるような方針で系統保育案を立てようとするのであります」³¹⁾と、保育項目や遊び、生活における様々な活動がつながりをもって、一つの幼稚園生活を作り上げるような系統的保育案を理想として論をまとめている。

6. 保育現場における倉橋の保育理論の意義

倉橋の幼稚園教育への関わりとその保育理論について年代を追ってみてきた。保育現場における倉橋の業績を以下の3点から考案する。

1) 倉橋の保育理論の特徴

倉橋の保育理論は、幼稚園教育とはどのようなものでなければならないかを附属幼稚園の実践を見つめながら考え、保育現場の保母に説きながら積み上げていったものである。倉橋の保育理論には様々な特徴があるが、大別すると次の3つがあげられる。

第一には、倉橋が幼児教育の目標や保育理念を子どもの視点から考えたことである。倉橋の「保育入門」「幼児教育の特色」「就学前教育」で述べられているように、就学前教育の目的は、人間の基礎教育として子どもの心身の健全な発達を促すことであり、幼児の自発性を育て、幼児集団相互の中で社会性を身につけ、道徳性の芽生えや様々な習慣を養い、幼稚園生活の中で幼児が自己充実できることとしてい

る。この幼児の教育目標は、倉橋が最初に学んだ児童心理学の知見やフレーベルの思想によるところも大きい。特に附属幼稚園で子どもに関わりながら保母との対話を通して幼児自身が身につけることが望まれる力を確信していったことに大きな意味があると思われる。

第二には、幼児の教育方法は幼児教育特有のあり方が望ましいと提唱したことである。倉橋の保育理論では、「生活本位、遊びの尊重、環境を通して・機会を捕らえて、概念的・観念的ではなく具体的に学ぶ」という幼児期特有の教育方法が幼児にはふさわしいとしている。倉橋の教育方法論は、フレーベル主義の恩物批判、知識注入的な机の保育や教師主導の形式主義保育への批判から出発しているが、倉橋は特に子どもの視点から自由保育の理念や遊び・生活を通じた学びが重要であるとし、幼児教育は小学校教育とは異なる教育方法をとるべきと提唱したことに意義があるといえる。

第三には、幼児期に身につけなければならない様々な力を幼稚園生活の中で獲得できるよう、保育者が誘導していくという保育者の指導・関わりの視点を導き出したことである。「幼児生活の充実指導」「幼児生活の誘導」「幼児生活の教導」と保育者の子どもへの関わりや指導の観点から水準が上がっていくモデルを示しながら、倉橋は「幼児のさながらの生活－自由設備－自己充実－充実指導－誘導－教導」という保育理論を完成させたことである。

これらの倉橋の保育理論はどのようにして形成されたのだろうか。これは倉橋自身が「ちょうど新進の大学教授が、年々の特殊講義を一年がかりで用意するように、彼は、大阪講習のために年々新しく勉強させられた」³²⁾と述懐しているように、倉橋が幼稚園の保母に向けて毎年行っていた保育講習会での講義の中で理論と実践を結びつける必要に迫られ、練り出されたものである。倉橋が当時の児童心理学の知見や欧米の様々な保育実践を参考にしながらも、今後の日本の幼稚園教育を作り担っていく保育者にとって、有用かつ「幼児のため」の保育理論を保育現場の中で少しずつ構築していったことにその意義があるといえる。

2) 保育理論からカリキュラム論へ

明治から昭和初期にかけて幼稚園で行われていた活動は、幼稚園令施行規則で定められていた遊戯、唱歌、観察、談話、手技等の保育項目であったが、倉橋は遊戯（遊び）の重要性と、その遊びの種が系統的に発展していくような保育者の誘導が必要であること、これらの保育項目がバランスよく含まれる誘導保育案を展開しながら幼児さながらの生活が行なわれることが理想であるとした。つまり、これらの保育項目と遊びや生活との関係性を考えつつ、誘導保育論を系統的保育案に結びつけていったのであり、保育理論を理論として終わらせず、保育理論から誘導保育を行うための保育案・カリキュラムの問題にまでつなげたことにその意義がある。

倉橋は、系統的保育案の実際の中で4.5歳児の1年間ずつの年間計画を示し、その中に期間計画と週案の計画を盛り込んだ教育課程と指導計画の立案方法について示した。また教育課程や指導計画などのカリキュラムの中に、保育項目がどう位置づき、誘導保育論として展開するかという保育理論と計画を結びつけた考え方を提案した。つまり教育課程・保育課程や指導計画などのカリキュラムの必要性を挙げながら、従来からある保育項目と遊びや生活の関係性をどう捉えることがより幼児のための保育としてふさわしいのかという点から系統保育案を考案したのである。これらは、矢野健夫が「倉橋らの『系統保育案』は、幼児の生活をふまえて、それを構造的に構成した、日本ではじめての保育案であった」、また戦後のコア・カリキュラム運動の成果に学びながら、三層構造を提案した久保田浩らによるカリキュラム論を思い起こすことができるため、「この『系統保育案』は戦後のカリキュラム構造論に直接つながる先駆的業績であったのである」³³⁾と評価しているように、倉橋の系統保育案の構想には領域や保育構造につながるカリキュラム論が潜んでいた。すなわち、倉橋の遊戯、唱歌、観察、談話の手技等の保育項目の捉え方が「領域」構造化への足がかりとなっており、戦後の幼稚園教育要領や保育所保育指針の策定の際に議論された「幼児の望ましい経験」と「領域」がどう結びつくかという領域の概念化の原点がここに存在していたといえる。

3) 保育者のための保育研究の萌芽

倉橋は幼稚園の保母に向けた講習会で、「御遠慮なしに互いに研究せらるることを希望するのであります」³⁴⁾、「ただ預かっておくという様なことでわれわれ幼児教育者の任務が済みましようか。これまた、大いに研究を要するところです」「教育的にも社会的にも、わが国の幼稚園はいかなるものであるべきかを、その幼稚園令について、最も正しく、しかも、よく活用して、研究しなければなりません」³⁵⁾とたびたび問いかけ、子どもの保育目標やそのための保育方法などを模索しながら保育者が考え、研究することの重要性を説いている。倉橋のこの投げかけは、倉橋の影響を受けた附属幼稚園の保母が誘導保育案につながる様々な保育実践を『幼児の教育』誌上で多数発表することを導いていくのである。

昭和23年に幼稚園・保育所の保育者の研究の場として日本保育学会が設立され、倉橋は初代会長となるが、倉橋の保育者に投げかけた問題意識は「保育者による」保育研究や保育実践研究を行なう基盤を形成したといえる。また倉橋の保育現場に身を置きながら幼児自身や保育者の保育実践について理論化する研究手法は、「保育者のため」の保育研究という一様式を作り出したといえる。倉橋の保育現場の中で保育現象を理論化する研究方法は、戦後の幼児教育界をリードしていった津守真や小川博久などの幼児教育研究者にも引き継がれ、保育現場の保育者に対して子どもや保育に関する多様で豊かな知見をもたらす先がけになった。

7. おわりに

倉橋が幼稚園教育に携わり、児童心理学の知見を現場の保母たちに語り始めた頃から、附属幼稚園での保母たちの実践を理論化した誘導保育論・系統的保育案の実際までの倉橋の保育現場への関わりと保育理論を概観した。倉橋の保育現場に残した功績は多々あるが、一つには、倉橋が初めて東京女高師附属幼稚園の主事として着任した27.28歳の頃に、2年前から女高師を卒業し幼稚園保母をしていた大瀧晴のエピソードにみられる。「先生の自由主義の幼児教育は、当時の古い形式的な幼稚園しか知らない

私共には何もかれも驚異であり、そして即時に実現の希望にそそることばかりでした。しかも女高師附属幼稚園は全国にさきがけて先生の学説を実現しなければならぬ立場にありましたので、お若い主事さんを中心に若い私共保母は、日々希望にみちて企画をすすめ、先生の御説を片はしから実行にうつさせていただきました」「今まで、だんごを作り、象を作り、猿を作り、ただ、それだけとして終わっていた粘土細工を、今度は動物園を作ることを目的として子どもはそれぞれ希望に燃えて一生懸命に作って、動物園を開き、見物ごっこをしたり、国技館の春場所、夏場所ともなれば、遊戯室に四本柱をしつらって相撲をとらせてみたり、今では何でもないことでも、当時としては、本当に新しいシステムとして、日々参観に見える全国の保母さん方をアッと言わせて鼓舞したものでした」と、倉橋との回想を語っている。このように、倉橋の理論は幼稚園の現場で、幼稚園は何のために必要か、そこで子どもたちに何を身につけさせるべきか、幼児のためのよりよい教育方法とは何かを保母たちと共に考え、積み重ねる中で理論化したものであるといえる。戦後、幼稚園教育要領や保育所保育指針に保育目標や保育方法が示されたが、子どもの心身の発達の育成や、遊びと生活による保育、教育課程や指導計画の立案など、倉橋が提唱した内容がこれらの中にすべて含まれている。倉橋の保育理論が現在の保育現場でも生き続け、保育者の拠りどころとなっている理由は、倉橋の論が「子どもにとってよりよい保育とは何か」「保育者はそのために何をすべきか」を常に問い続けて編み出してきた結果の保育理論だからであろう。その意味を今一度、深く問い直すことも幼児教育に携わる者にとっては重要であるだろう。

注

1) 文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに、1979年、22-41頁

2) 附属幼稚園の設立には当時の文部大臣であった田中不二麿の果たした役割が大きいと言われているが、明治4年に横浜で開かれた日本初の保育施設と呼ばれる「亜米利加婦人教授所」に関与した東京女

子師範学校校長の中村正直が幼稚園に理解を持っており、附属幼稚園の設置が進められたようである。詳しくは諏訪義英『日本の幼児教育思想と倉橋惣三』新読書社、1992年、65-68頁を参照。

- 3) 文部省、前掲、25-26頁、217-218頁
- 4) 同上、52-56頁
- 5) 同上、53-63頁
- 6) 同上、114-116頁
- 7) 同上、136-143頁
- 8) 森上史朗『子どもに生きた人・倉橋惣三ーその生涯・思想・保育・教育ー』フレーベル館、1993年、24-40頁
- 9) 同上、40-46頁
- 10) 山本敏子「教育実践と人間理解ー倉橋惣三の児童研究論に学ぶー」『駒沢大学教育学研究紀要』第29号、2013年、25-45頁
- 11) 小山優子「明治・大正期におけるS.ホールの児童研究の導入ー倉橋惣三と高島平三郎の活動を中心にー」『教育学研究紀要』第44巻（第1部）、1998年、497-501頁
- 12) 森上史朗、前掲、46頁
- 13) 同上、49-53頁
- 14) 同上、53-64頁
- 15) 倉橋惣三「幼稚園令の公布」『幼児の教育』第26巻5号、1926年、2-3頁
- 16) 倉橋惣三「幼稚園令の実際的問題」『幼児の教育』第26巻7・8号、1926年、63-70頁
- 17) 坂元彦太郎『倉橋惣三その人と思想』フレーベル館、1976年、59頁
- 18) 新庄よしこ「村の一部連作製作」『幼児の教育』第29巻12号、1929年、71-72頁、菊池ふじの「人形のお家を中心として」『幼児の教育』第32巻5号、1932年、54-64頁、神原キク「川の組」『幼児の教育』第32巻6号、1932年、28-33頁、村上露子「わたくしたちの特急列車『うさぎ号』」『幼児の教育』第32巻7号、1932年、46-52頁、徳久孝「わたくし達の自動車」『幼児の教育』第65巻8号、1966年、42-43頁、新庄よしこ「旅へ誘導保育の一案」『幼児の教育』第33巻11号、1933年、287-39頁、村上露子「大型

の動物製作」『幼児の教育』第35巻3号、1935年、66-74頁など。

- 19) 倉橋惣三「幼児保育の新目標」『婦人と子ども』第12巻10号、1912年、459-478頁
- 20) 倉橋惣三「保育入門(一)～(十三)」『婦人と子ども』第14巻1号、1914年から、第15巻12号、1915年まで全13回の連載をしている。
- 21) 児玉衣子「倉橋惣三の『子どもの生活』論に保育評価の手かがりを探る」『幼児の教育』第110巻4号、2011年、45-49頁
- 22) 倉橋惣三「幼児教育の特色」『婦人と子ども』第15巻9号、1915年、365-373頁
- 23) 倉橋惣三「就学前の教育」『倉橋惣三選集第三巻』フレーベル館、1965年、421-437頁
- 24) 倉橋惣三『幼稚園保育法真諦』（『倉橋惣三選集第1巻』）フレーベル館、1965年、30-57頁
- 25) 倉橋の誘導保育案はアメリカのキルパトリックによる「プロジェクト・メソッド」から学んだものとの見方が強い。詳しくは、穴戸健夫『日本の幼児教育(上)』青木書店、1988年、36-37頁を参照。
- 26) 同上、69-73頁
- 27) 倉橋惣三「系統的保育案の実際」『大正・昭和保育文献集第六巻』日本らいぶらり、1978年、4-36頁
- 28) 倉橋惣三「保育案」『幼児の教育』第36巻9号、1936年、99-145頁
- 29) 同上、55-60頁
- 30) 同上、60-65頁
- 31) 同上、65-66頁
- 32) 森上史朗、前掲、46頁
- 33) 穴戸健夫、前掲、43-44頁。「保育構造論」については、小山優子「幼児教育カリキュラムの史的展開ー戦後わが国の『保育構造』論を中心にしてー」『島根女子短期大学紀要』第40号、2002年、41-51頁を参照。
- 34) 倉橋惣三、前掲『幼児教育の特色』365-366頁
- 35) 倉橋惣三「幼稚園令の実際的問題」『幼児の教育』第26巻7/8号、1926年、63-70頁

(受稿 平成27年11月9日、受理 平成27年12月24日)